中学生の社会的行動についての研究(73)

～夫婦関係が子の抑うつ症状へ及ぼす影響の経年変化～

○井上裕光¹・氏家達夫²・二宮克美³・五十嵐敦⁴・山本ちか⁵

(¹千葉県立保健医療大学・²名古屋大学・³愛知学院大学・⁴福島大学・⁵名古屋文理大学短期大学部)

キーワード: 抑うつ症状、夫婦関係、中学生

Developmental study on Japanese adolescents' social behavior(73) –the time-varying Depressive symptoms by their marital relationships –

INOUE Hiromitsu¹, UJIE Tatsuo², NINOMIYA Katsumi³, IGARASHI Atsushi⁴, YAMAMOTO Chika⁵

(¹Chiba Prefectural Univ. of Health Sciences, ²Nagoya Univ., ³Aichi Gakuin Univ., ⁴Fukushima Univ., ⁵College of Nagoya Bunri Univ.)

Key words: Depressive symptoms, marital relationships, junior high school students

目 的

中学生の社会的行動の発達の変化をもたらす要因として、ふだんの気分や抑うつについての変化がある。ここでは、抑うつへの防御要因と促進要因とを検討した、氏家ら(2010)の中1～中3 横断モデル(図)を紹介し、縦断的な測定に基づく夫婦関係―子の抑うつ症状関係モデルの概要を示す。

方 法

一般化のために二地点での測定を行った。＜調査協力者＞

表 横断モデルの特性				
		男	女	計
愛知	1年生	190	203	393
	2年生	196	208	404
	3年生	183	174	357
		569	585	1154
福島	1年生	154	168	322
	2年生	156	155	311
	3年生	145	128	273
		455	451	906

愛知は名古屋大都市圏の2都市の9つの中学校の生徒4,484名とその両親、福島は福島県の1都市の5つの中学校の生徒

3,343名とその両親。子どもと両親の回答がすべて揃っている愛知1,169組(26.1%, 1年生396名, 2年生410名, 3年生363名, 男子569名, 女子585名, 不明15名)と福島914組(27.3%, 1年生325名, 2年生312名, 3年生277名, 男子455名, 女子451名, 不明8名)のうち、性別不明者を除いたものが横断モデルの分析対象である(表)。＜調査時期＞両親・子ども双方への測定は、横断モデルでは2002年9月、縦断モデルでは、中学1年(2002年9月)、2年(2003年9月)、3年(2004年10月)で各1回の調査を行った。＜調査方法＞各中学校を通して、各家庭に配布し、回答後に配布時の封筒に入れ、封をしてから学校に提出してもらった。＜質問項目：両親＞父親母親それぞれに、「夫婦間葛藤知覚」5項目、「子どもに対する親行動」41項目を用いた。横断モデルでは、「夫婦間葛藤知覚」5項目(父母とも一因子)、「子どもに対する親行動」温かさの13項目・冷たさ11項目(父母とも二因子)としてモデル化した。＜質問項目：子ども＞「子どもの親との関係知覚」25項目、「抑うつ症状」34項目を用いた。横断モデルでは、「子どもの親との関係認知」は温かさ・信頼13項目、距離感9項目(二因子)、「抑うつ症状」は30項目の一因子構造を用いた。＜回答形式＞抑うつ症状は最新の3ヶ月間の頻度を「めったにない」「いくらかある」「時々ある」「いつもある」の4段階評定、その他は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「かなりあてはまらない」「非常にあてはまらない」の6段階評定を用いた。抑うつ症状については「めったにない」を0点、「いつもある」を3点と得点化した。そのほかの6段階評定では、「非常にあてはまらない」を1点、「非常にあてはまる」を6点と得点化した。＜項目内容：抑うつ症状＞抑うつ・気分5項目、思考力・集中力の低下・精神運動性の抑制4項目、易疲労性・気力の減退4項目、無価値感・罪責感4項目、不安・心配・悲観4項目、不眠・睡眠過多4項目、食欲減少・食欲過多3項目、身体症状6項目から構成されている。＜項目選抜：抑うつ

つ症状＞抑うつ状態因子と身体反応因子とは斜交2因子で因子間相関が0.85であり、「朝起きられない」「昼間に寝てしまう」「もどすほど食べ過ぎる」「吐いたことがある」4項目を除外した場合CFAで一因子モデルが成り立ち、整合性の指数 α は0.934となる。以後、性別不明を除外した30項目の平均得点を抑うつ症状得点とした。

横断モデルでは、性の影響を性別の抑うつ症状得点の分布と、性変数からの因果モデルで検討し、性差に基づくモデルを採用した。さらに、地域ごとに有効なモデルを検討し、最もパスが少ない簡約型の因果モデルを報告した。この横断モデル(父母間の葛藤以外を等値)を基本とし、以下の検討を行った。1)横断データ中の縦断データ第一時点となる、中1において、横断モデルのレプリケーションとなるか。2)レプリケーションは、地域レベルで見られるか、3)性別レベルで見られるか。4)構造としての同型性が言えるか。

結果と考察

1)包含関係にあるデータだが、多母集団の解析結果からは、同じ構造と考えられる(夫婦間葛藤の共分散のみ自由推定)。2)地域間の傾向は横断モデルと似ている。3)性による違いも横断モデルと似ている。4)地域性別ごとに単独であてはめた場合には、福島女子の場合(図2)に、「母の夫婦間葛藤」が「母の温かさ」へほとんど寄与しない(横断モデルは「母の温かさ」を低める)という違いはあるが、全体として見た場合には、データへの適合は悪くはない。しかし、縦断モデルでは、セレクションバイアスの可能性が見られた。つまり、中1中2の縦断で216名(145=74+71名, 71=26+45名)、中1中2中3の縦断で112名(87=46+41名, 25=9+16名)となり性別ごとのモデル適合が安定しない。中1中2の時系列では、ほぼ同じ構造が見られる。中1～中3では男女別のモデルとなり、男の方が抑うつ症状抑制が見られる。

引用文献

氏家ら(2010) 夫婦関係と中学生の抑うつ 発達心理学研究 <付記: 科研費・基盤研究(B)(1)14310055の補助をうけた。>